

「消化器病学」

編集 亀田 治男 東京慈恵会医科大学教授

杏林大学教授

相 馬 智

Old boy には昔懐かしいブルーラインが粧いも新たに NIM ブルーラインとしてお目見えした。当時の内科学、外科学などの系統講義の内容とはうって変わり、解剖、生理、生化学など基礎的事項と臨床とを巧みにインテグレイトさせている。教科書といえばブルーラインしかなかった時代の筆者にとっては、まさに今昔の感がある。教壇に立ち学生を教育する立場に立って感じる事は、現代はまさに情報過多の時代で、限られた時間で学生にこれを如何に能率よく学ばせるかということである。ここに新しいカリキュラムの編成や、基礎と臨床のインテグレイションの必要が生じた理由がある。この NIM シリーズの消化器病学は、まさにタイムリーな教科書といえる。過去において系統講義のみによる教育が批判され、ベッドサイド教育が重視されるようになり、同じような考え方で総合講義がもたれた時代がある。しかし今回のこの本に見られるような斬新な項目立てではなかった。実に見事な項目立てである。前半は管(くだ)学15項目、後半は肝(きも)学18項目、総計33項目よりなる。いずれも1項目1時間半の講義として組まれており、いずれも聞いてみたい、読んで見たいと感じる

魅力をもった読切り型である。

繙いてみて先ず感じることは、図表が極めて分かり易くイラスト化され、最新の病態生理の理解に役立つ工夫がされていることである。

小見出しがゴシックで欄外におかれ、見易く、極めてゆったりした感じになっている。しかし読んで見るとその内容の豊富さに吃驚する。講義で補足された説明を書き込むスペースも十分である。ただ1項目1時間半の内容としては、一寸ヘビーな感じがなくてもいい。しかしイラストが豊富なので、スライドや黒板を利用した従来の講義の方法からみれば、書き写しの労力や非効率さはある程度さけられるのであろう。

とにかく驚いたことは、わずか33項目の中に消化管の全疾患を、縦横の関係をくずし、共通項をひろいだして盛り込んでいることである。ある疾患を運動の異常でピックアップし、また症候学的にとらえるといった、極めて難しい事業を達成していることである。例えば従来では、便秘や下痢は疾患の一症状としてのみあつかわれたが、これが項目として独立し、その中で病態生理の上から各種疾患があつかわれるといった具合である。ベッドサイドでのテキストとしては、まさにうってつけであ

る。無味乾燥な管(くだ)学が粧いをこらせばこのような見事な変身をとげられるのであろうか。肝(きも)学の病態生理学的解説は見事というほかはない。肝炎や HB 抗原の最新の考え方、薬物と肝、代謝異常と肝といったとらえ方は、実に分かり易く、疾患に対する考え方をダイナミックにする。随所に生理、生化学的最新の情報が組みこまれ、また疫学までもりこまれており、疾患全体の全貌が把握し易い。同時に病態生理を通じて各疾患のつながりも理解し易い。重要な文献の記載も親切である。

ただ講義の面からみると、一単位一時間半は如何にも重荷すぎる。今一つ、治療の面で外科的処置の解説がちょっと少ない気がする。術式や適応の解説をもう少し補足し、単位や時間を増せば、この本1冊で消化器病に関するすべてが学べることになるだろう。基礎と臨床のみならず、内科と外科のインテグレイションも NIM シリーズの大きな役割であろう。いずれにせよ学生のみならず、第一線の内科医、外科医の座右の書である。

B 5 頁446 図125 写真39 1978 ¥4,300
〒230 医学書院刊